
現在の和牛動向と展望

株式会社食肉通信社 大阪本社 山内紘記

講演者：山内紘記（ひろき）

- ・食肉通信社大阪本社 取締役・事業統括部部長

担当：牛肉全般、兵庫県担当

- ・お肉食べ歩き インフルエンサー活動 フォロワー 1 万人

- ・食事処へそ店主（家業） 神戸ビーフ牛丼、神戸ビーフステーキ提供

昨年 1 回テレビ出演、今年 3 回出演

- ・JAPAN BEEF FESTIVAL実行委員長

兵庫県加古川市のお肉屋さんを中心となって

加古川を「肉のまち」とする目標に向けて活動。

将来的には全国でこの活動を広げていきたい。

今回の話題

東京市場の和牛相場

和牛の全国と畜頭数推移

5 等級発生率

和牛 4 等級、交雑牛、乳牛、豚相場

牛肉の小売価格（国産、輸入）

家計における牛・豚肉消費

外食動向

牛肉輸出の推移

和牛出荷頭数の見通し

和牛に求められる付加価値

東京市場の和牛相場

年次	和牛去勢A5	前年対比	市場環境	その他
2014年	2213円	104%	2011年にセシウム汚染問題	同じく2011年に安愚楽牧場倒産
2015年	2552円	115%	和牛頭数が減少傾向	
2016年	2852円	112%		
2017年	2814円	99%		
2018年	2722円	97%	再び和牛増加	
2019年	2442円	90%		
2020年	2538円	104%	コロナ→冷凍保管事業	
2021年	2602円	102%		
2022年	2524円	97%	10月インバウンド規制緩和	
2023年	2525円	100%	5月コロナ 5 類移行	
2024年	2493円	98%		
2025年	2524円	101%		

和牛の全国と畜頭数推移

年次	和牛	市場環境
2014年	50.7万頭	セシウム汚染問題
2015年	48.2万頭	
2016年	44.4万頭	
2017年	43.9万頭	
2018年	45.2万頭	
2019年	45.7万頭	
2020年	47.7万頭	コロナ→冷凍保管事業
2021年	48.2万頭	
2022年	48.9万頭	10月インバウンド規制緩和
2023年	50.6万頭	5月コロナ5類移行
2024年	54.2万頭	
2025年	55.4万頭	

黒毛和種子牛の月別平均販売価格（alic、全国、税込）

年月	雌 平均価格	雄 平均価格	総平均価格	前月差	前年同月差	前年同月比	取引頭数
2025-05	601,259円	717,146円	666,809円	-4,441円			31,179頭
2025-06	585,227円	698,183円	648,889円	-17,920円			28,238頭
2025-07	586,844円	694,515円	646,597円	-2,292円			32,939頭
2025-08	598,142円	713,073円	662,736円	16,139円			22,798頭
2025-09	602,380円	716,302円	667,062円	4,326円			30,586頭
2025-10	605,673円	721,091円	670,482円	3,420円			25,775頭
2025-11	654,257円	770,864円	719,199円	48,717円			28,833頭
2025-12	710,046円	822,413円	772,563円	53,364円			28,501頭
2026-01	712,217円	823,297円	774,048円	1,485円	218,739円	39.4%	28,683頭
2026-02	750,638円	861,323円	811,490円	37,442円	215,566円	36.2%	23,677頭
2026-03	775,285円	894,030円	842,052円	30,562円	208,968円	33.0%	28,383頭
2026-04	792,218円	914,836円	860,899円	18,847円	189,649円	28.3%	27,153頭
2026-05	789,462円	900,926円	852,272円	-8,627円	185,463円	27.8%	29,329頭

5 等級発生率(AB等級計)

日本食肉格付協会

年次	和牛去勢	市場環境	概況
2014年	28.1%	セシウム汚染問題	5等級は3割弱
2015年	32.9%		
2016年	35.8%		
2017年	39.3%		
2018年	42.4%		
2019年	47.9%		
2020年	51.7%	コロナ→冷凍保管事業	5等級が5割上回る
2021年	55.2%		
2022年	61.7%	10月インバウンド規制緩和	5等級率6割に
2023年	64.8%	5月コロナ 5 類移行	
2024年	69.0%		
2025年	73.4%	11月末時点	5等級率7割に

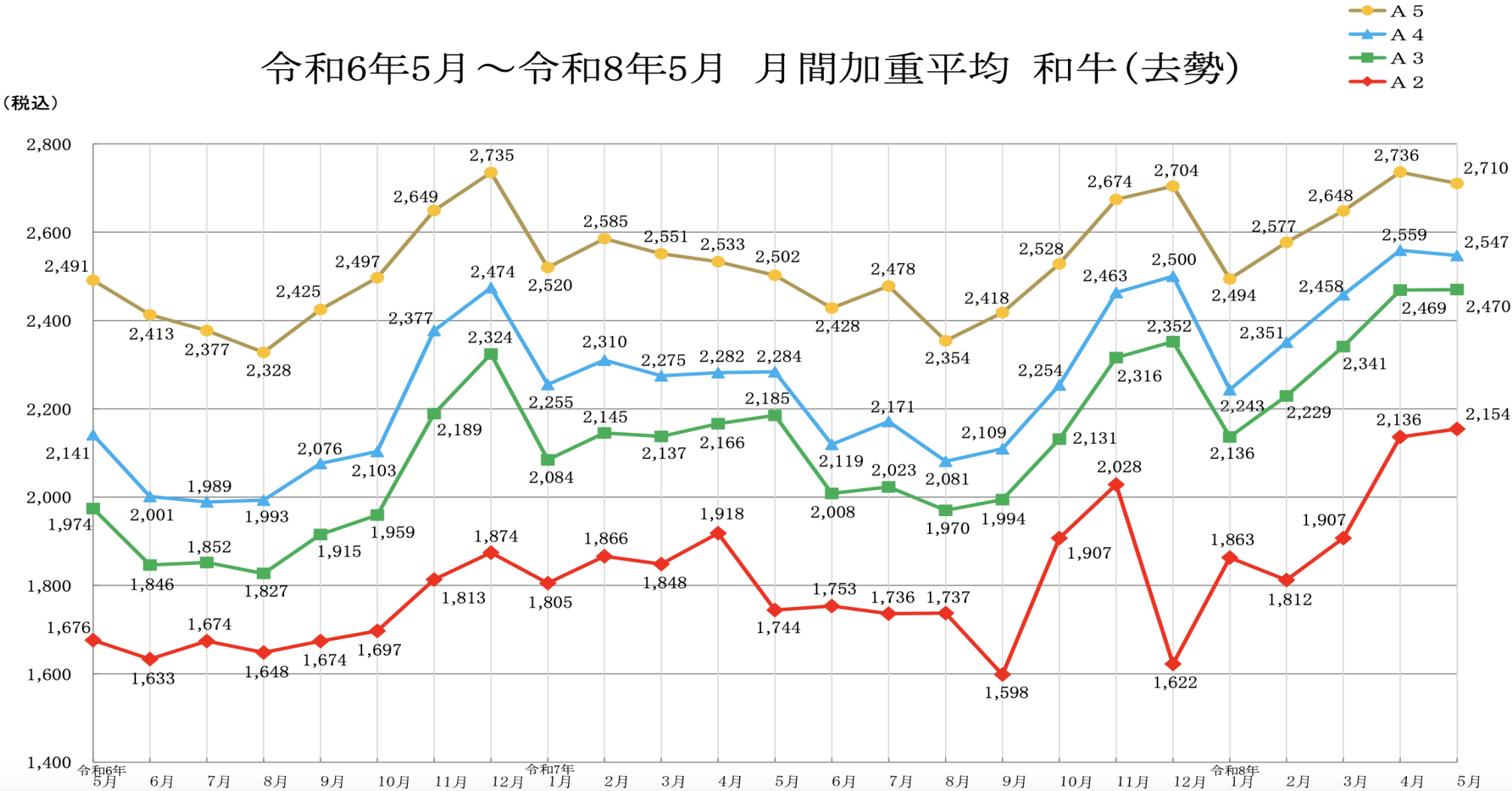
その他、東京市場・価格推移

	和牛去勢A4	A5和牛との価格差	市場環境
2020年	2185円	367円	5等級の発生率の高まりに伴い、4等級以下の発生率は今後、減少していくことが見込まれます。そうした中においては、4等級はより希少性を増すことから、5等級価格に近づくことが予測されます。実際、24～25年の価格はより5等級に近づいています。
2021年	2402円	328円	
2022年	2304円	342円	
2023年	2136円	416円	
2024年	2098円	379円	
2025年	2167円	341円	
	交雑牛去勢B3	A5和牛との価格差	市場環境
2020年	1470円	1082円	交雑牛は、今後、廃業に伴う乳牛の減少により、長期的には減少するとされています。しかし近年は、高値が続いている和牛相場の代替商材として、交雑牛生産を始める量販店に紐付いて、交雑牛を増産する傾向も見られています。また、乳牛の減少、輸入牛の減少に伴い、交雑牛の役割は大きくなり、引き合いは増えています。
2021年	1547円	1183円	
2022年	1483円	1163円	
2023年	1479円	1073円	
2024年	1584円	893円	
2025年	1639円	869円	

価格推移その2

	乳牛去勢C2	A5和牛との価格差	市場環境
2020年	1018円	1534円	乳牛は現在、生産頭数の大幅な減少に伴い、量販店や専門店での取り扱いが大きく減っています。産み分け技術の高まりで去勢牛は大きく減りました。牛乳消費量の減少と連動している中、飼料コストの上昇で、酪農業は危機的な状況にあります。こうした中、希少性が増していることで相場は上昇傾向にあります。
2021年	1098円	1632円	
2022年	1047円	1599円	
2023年	905円	1647円	
2024年	1014円	1463円	
2025年	1182円	1326円	
	豚「上」	A5和牛との価格差	市場環境
2020年	570円	1932円	ご存知の通り、豚肉相場は高騰が続いています。猛暑による生産量の伸び悩み、輸入豚の高騰や牛肉・鶏肉の代替需要もあります。直近ではスペイン豚がASFの影響で輸入停止となりました。今年はこの影響を大きく受けて、今年も高値となりそうです。
2021年	550円	2116円	
2022年	596円	1998円	
2023年	604円	1959円	
2024年	667円	1816円	
2025年	662円	1831円	

直近の東京市場相場推移



牛肉の小売価格(東京)

総務省：「小売物価統計調査」
「消費者物価指数」

	国産牛肉（ロース）	消費者物価指数	市場環境
2020年	928円	100	国産牛肉の価格は、相場との相関性があまり見られません。物価はじわじわ上昇しています。この物価上昇率は日本全体の上昇と比例しており、インフレによるものと仮定できます。
2021年	910円	101	
2022年	868円	102	
2023年	874円	104	
2024年	926円	108	
2025年	940円		
	輸入牛肉（肩ロース、モモ）	消費者物価指数	市場環境
2020年	266円	100	輸入牛肉については、コロナ後の生産体制の変化、現地労働者の労働コストの急激な上昇、近年の円安傾向を受けて高値となっており、今後も高値が見込まれます。物価指数は急上昇しており、これにより生活負担が高まっています。
2021年	284円	102	
2022年	311円	114	
2023年	330円	124	
2024年	352円	133	
2025年	364円		

肉類と魚介類の1人当たり消費量

農林水産省「食料需給表」 | 国民1人・1年当たり供給純食料 (kg)

年度	肉類	うち牛肉	魚介類	差（肉類－魚介類）
2014年度	30.1	5.9	26.5	3.6
2015年度	30.7	5.8	25.7	5.0
2016年度	31.6	6.0	24.8	6.8
2017年度	32.7	6.3	24.4	8.3
2018年度	33.2	6.4	23.6	9.6
2019年度	33.4	6.5	25.2	8.2
2020年度	33.5	6.5	23.6	9.9
2021年度	34.0	6.2	22.7	11.3
2022年度	34.0	6.2	21.5	12.5
2023年度	33.9	6.1	21.7	12.2
2024年度	34.3	5.9	21.3	13.0

2014年度

3.6 kg差

わずか3ポイント差

2024年度

13.0 kg差

ポイント差まで拡大
肉類への期待は高い

家計における牛・豚肉消費

牛肉	家計支出金額	前年比	購入量	前年比	市場環境
2020年	23,675円	111.8%	7,186g	109.9%	コロナで2020年は家計消費が増加。その後、ほぼ毎年の減少が続いている。購入量はかなりの大幅減となっている。
2021年	23,210円	98.0%	6,738g	93.8%	
2022年	22,356円	96.3%	6,202g	92.0%	
2023年	21,449円	95.9%	5,853g	94.4%	
2024年	21,321円	100.8%	5,529g	94.5%	
2025年	20,880円	97.9%	5,401g	97.7%	
豚肉	家計支出金額	前年比	購入量	前年比	市場環境
2020年	32,861円	110.9%	22,990g	108.6%	購入量が減少しており、相場高の影響によるものと思われる。一方、支出金額の増加は、頻度品としての豚肉の底堅い需要によるものとみられる。
2021年	31,892円	97.1%	22,554g	98.1%	
2022年	32,487円	101.9%	22,297g	98.9%	
2023年	33,553円	103.3%	22,041g	98.9%	
2024年	33,818円	100.7%	21,835g	99.1%	
2025年	35,416円	104.7%	22,142g	101.4%	

外食店の動向

	外食売上高	客数	店舗数	客単価	市場環境
2020年	84.9%	82.2%	98.2%	103.3%	コロナで規模が縮小。そこから驚異的に回復が進んでいる。
2021年	98.6%	98.0%	96.4%	100.5%	
2022年	113.3%	106.2%	99.1%	106.7%	
2023年	114.1%	106.3%	98.9%	107.3%	
2024年	108.4%	104.3%	99.7%	103.9%	
2025年	107.3%	102.9%	100.7%	104.3%	
	焼き肉店の倒産件数		市場環境		
2020年	14件		2025年の倒産件数は過去最多。負債1,000万円以上のもの。2020年のコロナ下ではゼロ融資によりむしろ減少。その後、融資の返済が始まり、物価高、特に輸入牛肉の高騰が痛手となっている。タン、ハラミといった主力輸入肉の値上げを売価に反映させると店頭価格が高くなり、客離れに繋がっている。		
2021年	16件				
2022年	16件				
2023年	27件				
2024年	45件				
2025年	59件				

14

牛肉輸出推移

財務省：輸出統計

	輸出量	輸出額	市場環境
2014年	1,251t	82億円	2013年から2014年にかけて、東南アジア諸国（ベトナムなど）やEUへの輸出が解禁・拡大され始めた時期です。2014年は、日本が「農林水産物・食品の輸出拡大」に本格的に舵を切り始めた時期です。2024年は初めて輸出量が1万トン、輸出額が600億円の大台を突破した歴史的な年となりました。 輸出量の増加に期待がかかる一方で、口蹄疫はアジア諸国で発生しており、韓国でも先月に発生しております。日本でも発生が確認された場合、輸出がストップする可能性があります。
2015年	1,611t	110億円	
2016年	1,909t	136億円	
2017年	2,706t	192億円	
2018年	3,560t	247億円	
2019年	4,339t	297億円	
2020年	4,743t	289億円	
2021年	7,879t	537億円	
2022年	7,454t	520億円	
2023年	8,421t	570億円	
2024年	10,826t	648億円	
2025年	11,859t		

2026年の牛と畜頭数見通し

年次	牛	和牛	乳牛	交雑牛
2020年	1,051,862	477,761	328,203	228,052
2021年	1,055,075	482,847	325,007	228,798
2022年	1,087,545	489,792	330,560	248,612
2023年	1,104,523	506,677	320,153	260,789
2024年	1,115,150	542,515	306,221	255,660
2025年	1,093,294	554,576	275,803	260,713
2026年	1,087,876	538,541	288,205	250,375

市場環境

和牛生産量は近年、増加が続いており、2025年には55万頭まで増加しました。しかしながら食肉通信社の予測では、繁殖雌牛の出荷が続いたことなどを受けて、和牛生産頭数がわずかに減少するとみています。また、このタイミング以降、数年に渡って和牛生産頭数は減少するとみま

和牛に求められる付加価値

・ 単に 5 等級では差別化できない

- BMSの 2 ケタ化
- 雌牛強化
- モノ不飽和脂肪酸の含有量の測定
- ロースは赤く、モモは霜降りで
- 添加飼料の見直し（飼料米、食糧残渣の活用）

・ 生産現場と販売現場が抱える矛盾点

- 赤身志向と霜降り肉生産
- 枝肉重量の増加でステーキが切れない
- 産肉量が増えると必要頭数が減る

わが国の牛肉文化そのものへの課題

- ・ 子牛が高く、飼料も高いため再生産が難しい
- ・ そうした中でも素牛農家は高齢化で減少していく
- ・ 和牛相場は急騰しているが、モノはそこまで動いていない
- ・ 相場の上昇が今後も見込まれる中で、和牛ニーズはどうか
- ・ 霜降りに特化した和牛のさらなる霜降り化はどう影響するのか
- ・ 輸入ビーフも高値で手当てが難しくなっている
- ・ 我々は牛肉を食べ続けることができるのだろうか

力説したい点

霜降り肉はおいしい

A3等級は超希少。でも枝肉単価3000円にはならない

ロース以外のカタやモモには霜降りが必要

「たくさん食べられない」→赤身部位と食べ比べ提案

「たくさん食べられない」→食べなくていい。少量を高頻度で

霜降り肉は世界唯一の牛肉であり日本にしかない誇るべき文化

現在の輸出先は50カ国・地域弱。世界は200カ国ある

日本式の食べ方にこだわらない。タコス、ホットドッグなど